

G・M・ホプキンスの詩

桐 谷 四 郎

C・ディ・ルイス（一九〇四―七二）は、その「詩への希望」（一九三四）において彼ら三十年代の詩人が影響をうけた先輩はT・S・エリオット（一九〇五―五五年死）、オーエン Wilfred Owen（1893―1918）、ホプキンス G. M. Hopkins（1844―89）の三人であったという。エリオットは現代詩人のパイオニアとして何人も異存はないが、オーエン、ホプキンスはあるいは聞きなれない名前かもしれない。この三者に共通していることは、日常語のスタイルを用いきはめて強い烈しい効果をおさめたことである。

彼を陽のあたる処へ動かしてやれ。

いつも太陽はやさしく彼の目をさましたのだ、

故郷で、まだ鳥の種まきが終わっていないときさやかにながら。

この異郷の地フランスでもいつもそうだった、

この雪の降りつもった今日までは。

もしも何かが彼の目をさますのであれば、

あのやさしい、原初からの太陽がそれを知っている筈だ。

この若者は恐らく昨日、あるいは今朝戦死したのだ。(オーウェンもまた第一次大戦でその後死んだ。)この詩には生と死の矛盾があり、これを結びつけているのが太陽であり、その連想としての太陽の熱とまだ種まきの終わっていない故郷の畠である。平和な故郷と悲惨なフランスの戦場という連想もある。生と死と太陽、ここには奇想がある。奇想は対立、矛盾から生れる。

この奇想は最初十六世紀のエリザベス朝、特にダン、ハーバートなど所謂形而上詩人の詩に現われた。もっとも最近では当時の宗教改革後のヨーロッパに共通して現われたバロックの感受性と共通するものであるという、興味ある見解もある。

あなたのお恵みが 悪魔のわざを退け

私の頑くかな鉄の心を 磁石のように引きよせ給はんことを。(ジョン・ダン)

涼しくおだやかな、輝しく美しい日よ、

大地と空の婚いの日よ。(ジョージ・ハーバート)

これらの奇想は聖と俗の対立を巧みに解消して大いなる効果をおさめている。この形而上詩人の時代はさかんな地上的、人間的なルネッサンスの思潮と中世以来の強固な神秘的、宗教的な思潮の対立があった。奇想とはこのように、

詩人が心の現実をうたう時その心の中に大いなる対立、矛盾がある場合に生れるようである。

このことは、ホプキンスの詩においても例外ではない。彼の時代は唯物的、科学的な進化の思想の烈しいヴィクトリア朝であった。しかし彼はオックスフォード大学在学中からカソリック復興の運動に加わり卒業後はイエズス会に入会し、ついには牧師となつて説教を続けた。

春ほど美しい時はない。

草の芽はまるく、長く愛らしく水々しく頭をもたげる。

つぐみの卵は小さい低い天球のようだ。……

ガラス色の梨の木の葉すえと花は、まい下りる青い空にふれている。……

この水々しき、この喜びは一体何だろう。

あの天国エデンの大地の調べだ、旋律だ。おお、

それが色あせ、罪に汚れぬ内に手にとれ、貰ってしまうのだ。

ホプキンスの詩は殆どすべて天地自然の美をうたい最後にそこに神をみ、たたえるのであるが、その場合常に地上的なものと天上的なものの対立があり、連想があり、それがイメージとなっている。

世界は神の壮美にみちあふれている。

それはうち振る金箔の光のようにもえたつだろう。

こぼれた油の広がるように大いなるものになるだろう。

しかし、何故人間どもは神の咎をおそれないのか。

人間どもはいく世代にわたり、大地を踏みつけ、踏みくだいて来たのだ。

それは生業なまわざいにつかれ、手垢に汚れている。

その汚れは今やむきだしになっているが、人の足は靴をはきそれを感じない。

ここにも神の栄光と汚れた人間の対立があり、「うち振る金箔」とか「こぼれた油」のイメージには何か天上的なものを連想させるようである。この詩は更に続けて「これにも抱はらず自然は決してつきることはない。事物の奥ふかくにはやさしく清純ないぶきがある」という。

ここで私はホブキンスの詩論の根底をなすと考えられるインストレス (instress)、インスケイブ (inscape) なることを考えてみたい。日記などに言及されているのはインスケイブの方がはるかに多い。一八七一年の日記には次のような記載がある。インスケイブを考えるのに恰好のものと考えられる。

三月の終り、四月のはじめは芽ぶきの季節であり、インスケイブを考えるのによい。木の芽はふくらみ、木々にはいつもは分からない烈しさ、緊張感がある。それは次第にふくらんでゆく。この芽ぶきには新しいインスケイブの世界がある。トネリコの木には小さな花がばらまかれ枝の端まで広まっている。枝の芽ぶいている処はこぼらなっている。それは紐でゆわいておいて、まだそのあとの残っている指のようである。

ホプキンスの自然描写は日記全体の十分の九を占めるといわれるが、その描写は細かく美しい。この引用において特に注目すべきことは、芽ぶきの春の木々の持つ躍動的な生命感である。R・ブリッジズ宛の有名な手紙には「音楽において私の心を最もとらえるのは調べ、メロディーである。絵画ではデザインであるように、デザイン、パターンあるいはいつも私がインスケイプと呼ぶものは、詩において私がいつも心がけていることである。事物の個性を示すことはデザイン、パターン、あるいはインスケイプの徳であり、描写が奇態になるのはその個性のもつ欠点である。」という。ホプキンスの詩のスタイルは奇態、難解をもって有名であるが、それぞれの事物に独特のインスケイプを感じとって、いわばその心のリズムをそのまま描写しようとする時そのスタイルは奇態なものならざるを得ないであろう。また、これらの引用において考えるべきことはインスケイプとは事物の固有の特徴であり、その事物のデザイン、パターンでありそれはその事物の内的生命、存在が顕在化されたものである、ということである。

更に一八七〇年五月十八日の日記には、「ブルーベルが咲いていた。このブルーベルよりも美しいものは見たことがないと思う。これを見て、私は主の美しさを知るのであった。そのインスケイプには力とやさしい美しさが混りあっている、トネリコの木のように」とある。ホプキンスは力と生命感あふれる美、インスケイプを感得して神を連想するのであるが、その場合そのインスケイプの美、内的生命の美はそのまま神への愛につながるように思はれる。この場合、プロテスタントと異なりカソリックの神、イエスは今も教会を通じて生き続けているという教義とも関係するのかもしれない。又後述するイグナチウス・ロヨラの「精神の訓練」の影響は大きいであろう。更に内的生命の顕在化である個物のデザイン、パターンの美を愛し重視するホプキンスは、その後、あの中世の普辺論争に関係するダンス・スコータスの著作に接し、さらに信念を深めたこともつけ加えねばならない。又このインスケイプは単に草木の美し

さばかりではなく、「星空の夜」におけるように天空の美しさにも、又「まぐそ鷹」における翼をひろげて飛ぶ鳥の高貴な姿にも感得される。又次の如き注目すべき言及もある。

サンシキスミレは美しい、優美である。その花のしほむ時も花びらは真直ぐに小さな管、あるいはチューブのように曲がり美しいインスケイブをなしている。インスケイブは衰退にむかう物にはないということではない。老人の皮膚のたるみ、骸骨にもそれはある、嫌悪の気持がそこにならないならば。

インスケイブには躍動的な生命感必須のものと思われるが、生命の名残りでもそこにあればよいということだろう。このインスケイブを日本語に直せば、「聖なる内的風景」ともすべきではないだろうか。

次にインストレス (Instress) であるが、この語は前述した如くインスケイブに比べその用例ははるかに少い。又このインストレスとインスケイブの関連について、批評家の意見は必ずしも一致していないようである。ホプキンス学者の一人、ピック師は「インストレスとは美しき物がホプキンスの心を与える烈しい感情、連想を意味する語である」という。それは心の、内心の緊張であり、この緊張から聖なるヴィジョン、インスケイブが生れる。あるいは聖なるヴィジョンに向う意欲といつてもよい。ここで私はホプキンスがそれによりさかんに心の鍛練を続けたテクスト、イグナチウス・ロヨラ（一四九一—一五五六）の「精神の訓練」Spiritual Exercises に言及しなければならぬ。

この反宗教改革運動の勤行書の意味、目的については、ロヨラ自身のことばを借りれば、「それは吾人の良心を訓練し、冥想沈思祈とうし、又その他の精神を働かす方法を意味する。散歩し歩行し走ることが肉体の運動である如く、それは吾人の魂の乱れを除き、その後、魂の救済に役立つように神の意志をさがし求めることである、」という。

その勤行の主体は四週にわかれ、その第一週はおのれの罪を深く考え、それを知り悲しみ、改心を願うことである。第二週はキリストの生涯を考え、それにあやかろうとする考えを起こさせる。この場合、神による救済の選択ということが考えられ、神の意志に最もふさわしい生活態度を考える。第三週はキリストの受難を考える。それを考えることにより憐みの心、悲しみ恥辱の思いが高まり勤行者もそれにあやかろうとする。最後の第四週はキリストの復活とその光栄ある姿が連想され、神により与えられる大いなる恩恵を考え、神に対するあふれる如き愛を心中に感ずるにいたるのである。そして最後に「主よ、すべての私の自由、記憶、知力、意志のすべて私の持てるものすべてを受け給え。あなたはそれを私に与えて下さった。それを主よあなたにお返しする。すべてはあなたの物であり、御意志に従って処置して載きたい。あなたの愛と恵みをお与え下さい。それで私は十分です。」ということばがつけ加えられる。

更に、第一週の前に、「原理と基盤」という序言がおかれているが、これは精神の訓練の全体を総括しているという意味できわめて重要である。その要旨は「人間は、神をはめたたえ、あがめ仕え、その魂を救われるために創られた。人間以外のものは、すべて人間のため、また人間が創られた目的を助けるためつくられたのである。神に仕えるという人間の目的を助けるために、すべてのものを利用すべきであり、それ以外のものはすべて却けるべきである。それ故人間の自由意志の選択にゆだねられているものについては無関心の態度を取るべきである。病氣よりは健康を、貧しさよりも富を、恥辱よりは名譽を、短命よりは長寿を積極的に望むべきではない。要は我々人間が創造された目的、即ち神に仕え、あがめるといふ目的を助けるもの以外には関心を持たないことである。」

このようにきびしい、ただ神のため、神のみ胸にという精神の訓練をくりかえしている内に、おのずから勤行者に

は心の緊張が生れる。この緊張、神をみようとする意欲をホプキンスはインストレスと呼んだのではないだろうか。そしてこの緊張が美しきものと出会った時、それに触発されて聖なるヴィジョン、インスケイプが生れるのではないか。この場合、勿論ホプキンス生来のすぐれた美的感受性ということも考えねばならない。また彼が愛読したプラトンの地上の美は永遠の美の反映であるということは、また上に引用した神に仕えるという人間の大目的を達成するためには地上のあらゆるものを利用すべきであるということ、これらのことを考えれば地上の事物の美は——これは彼にとつてはその事物の内的生命が顕在化したものであった——天上の美、神の生命、栄光とつながるといふことは彼にとつては必然であったと考えることができる。「収穫のよろこび」という詩がある。秋の景色に聖なるヴィジョン、インスケイプを感じとつた詩である。

夏はおわる。荒々しい美しさである。稲むらがたち並んでいる。

空には、何という風の動きだろう。

いわし雲の美しいはずまい。ノ

このように奔放な、気ままなうろこ雲の動きが、これまでであったであろうか。

私は歩き、心を目をあげる。

わが主をかいま見ようとして、光りかがやく空の彼方に。

目よ心よ、美しき人の姿、唇も、

このように真実の卒直な、魂をうばうような愛のこたえを与えてくれたことがあろうか。

そして、空にかかる青々とした山々は主の 世界をすべる大いなる肩である。

—たたくましい、つやつやとした紫色の種馬のようノ—

これらのもの、この空と山はいつもここにあったのだ。ただそれを心で眺める人がいなかったのだ。

この二つのものが出あう時、私の心は大たんにたかぶり、翼をあげ、主に向ってつき進み、

主の足下に大地もろ共、身を投げ出すのだ。

しかし、ホプキンスの詩はこのように烈しく健康な神の讃歌ばかりではない。一八七七年僧職任命後、ロンドン、リバプール、グラスゴウで熱心に伝道の仕事を続けながらも、当時の産業都市の不潔なみにくい姿は彼のせん細な神経をいらだたせ、社会問題への目を開かせた。一八八四年、彼はダブリン大学のギリシャ語教授に任ぜられるのであるが、アイルランド自治をめぐる牧師間の意見の対立もあり、生来の憂うつ症は体力の衰えと相まって彼を苦しめた。当時の「恐ろしきソネット」と称せられるものの中には、彼のその頃の暗たんたる気持が烈しく映し出されている。

参考書目

Poems of Gerard Manley Hopkins (3rd Ed. Oxford)

Poems and Prose of Gerard Manley Hopkins (The Penguin Poets)

John Pick : Gerard Manley Hopkins, Priest and Poet (Oxford, 1966)

安田章一郎 G・Mホプキンス研究(清水弘文堂 昭和四十三年)